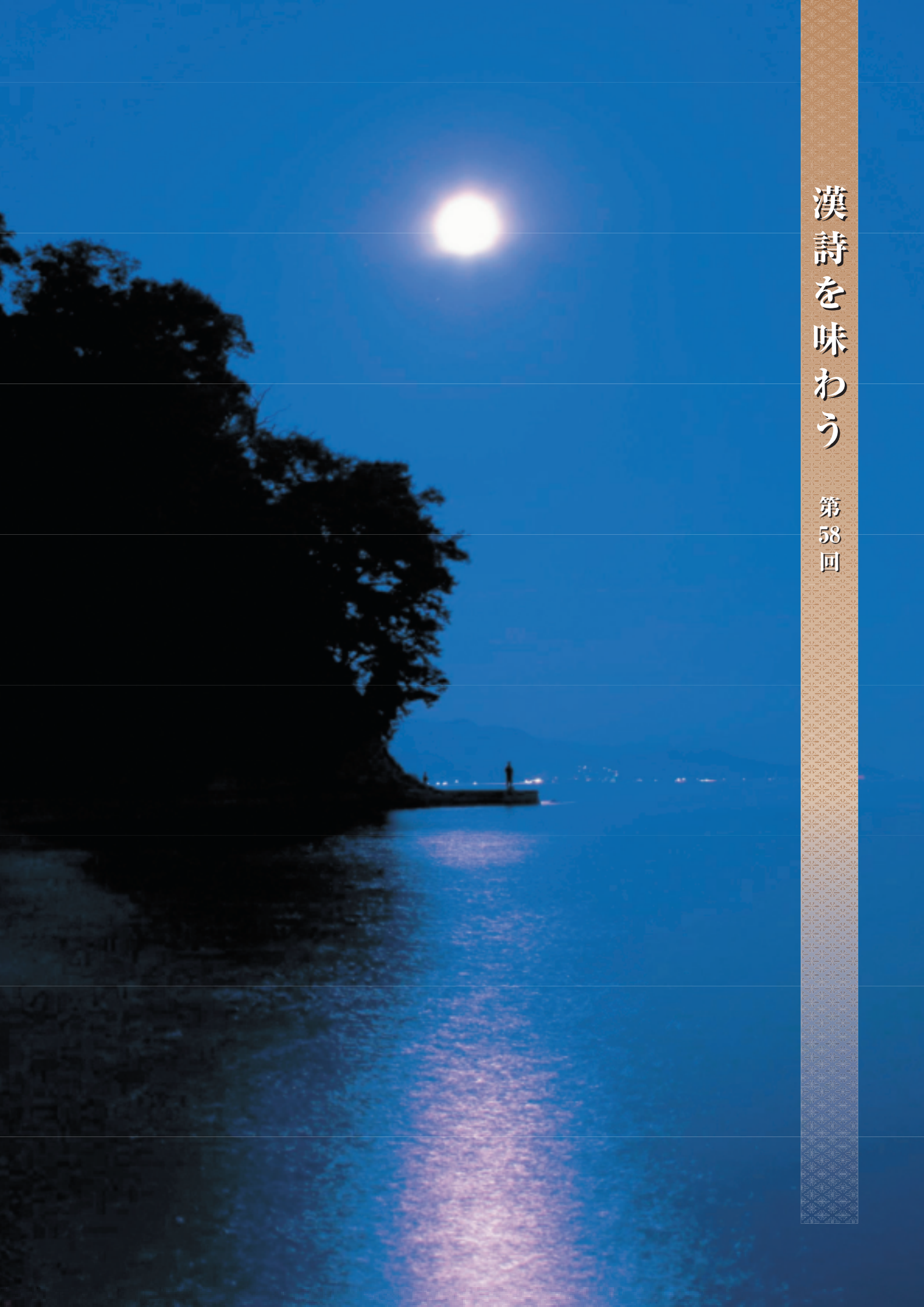


漢詩を味わう

第58回

哭晁卿衡（ちょうけいこうにこくす）

李　白

日本晁卿辭帝都　　日本の晁卿（ちょうけい）　帝都を辞し
征帆一片遶蓬壺　　征帆一片（せいはんいっぺん）　蓬壺（ほうこ）を遶（めぐ）る
明月不帰沈碧海　　明月帰らず　碧海（へきかい）に沈み
白雲愁色満蒼梧　　白雲愁色　蒼梧（そうご）に満つ

日本の晁衡はみやこ長安に別れを告げ
去りゆく帆の一片は蓬莱をめぐっていった
明月は帰らず　ふかい碧の海に沈み
白い雲とかなしみの色が蒼梧の空にみちわたる

《哭》　大声をあげて人の死を悼むこと。
《晁卿衡》　日本人阿倍仲麻呂の中国名。晁衡とも書く。奈良時代の文学者。
《帝　都》　長安をさす。
《征　帆》　去りゆく帆。
《蓬　壺》　前号で取り上げたように東方の海上にあると信じられた仙人の住む蓬莱の島。
《蒼　梧》　中国東南方の海岸地方の地名。

五六二年新羅の朝鮮半島南部、加羅諸国の併合以来、日本と中国・朝鮮との国交は途絶えていましたが、七世紀以降は中国への使節派遣の動きが次第に活発化しました。遣隋使・遣唐使の時代の到来です。推古天皇の摂政となった聖徳太子（五七四～六二二）は内政とともに対外政策も改め、大陸文化の輸入による国力の充実に努めました。遣隋使はその方策のひとつで、推古八年以降は四回以上派遣されています。第二回目には小野妹子などが乗船し、その時の国書「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙（つつが）なきや。」の一文で、隋の煬帝を怒らせたことは有名です。このことから過去の朝貢外交とは異なり対等な立場での国家外交を目指していました。

奈良時代の文学者、阿倍仲麻呂は遣唐使、多治比真人県守の随員として唐に留学し、長安に着いたのは七一七年、玄宗皇帝時代です。この船には二〇〇四年に西安で墓誌が発見されて話題となった井真成（いのまなり）も同乗して中国に渡ったとされます。仲麻呂は長安に留まること五十三年、玄宗の厚遇を得て、李白や王維、儲光羲らの詩人と交わり、役人としては秘書監となり、衛尉卿を兼ねました。

仲麻呂は七五三年に遣唐使藤原清河の船に便乗して、帰国の途につきましたが、暴風雨に遭って船は難破し北ベトナムに流され、仲麻呂は溺死したという噂が伝わります。この詩はその時に李白によって作られた哀悼の詩です。しかし、仲麻呂は助かりふたたび唐王朝に仕えましたが、漂泊の旅に出た李白は最後まで知らなかったようです。

「あまの原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」。小倉百人一首にも収められ、人口に膾炙されている仲麻呂のこの歌は中国を去る港で詠んだ歌といわれます。結局は生涯日本に戻ることはできず、七七〇年に七十三歳で彼の地で没します。同年に杜甫も五十九才で亡くなっています。

参考文献：筑摩書房「世界古典文学全集・李白」ＮＨＫ出版「漢詩への誘い」

烟霞（えんか） 梅香を遮（さえぎ）らず

《大意》霞がかっていてその姿は見えなくても、梅の花の馥郁（ふくいく）たる香りが漂ってくる。
徳のある人の芳香は何によっても遮（さえぎ）られることなく自然に伝わること。（禅語）

静　楽

《大意》静かなる楽しみ。また静かに楽しむこと。

読み　春星 草堂に帯ぶ（春の星空は草ぶきの家をそっと囲んでいる・杜甫「夜宴左氏荘」）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

大悟は師に存せず

ペン字部課題　（3月31日〆切）

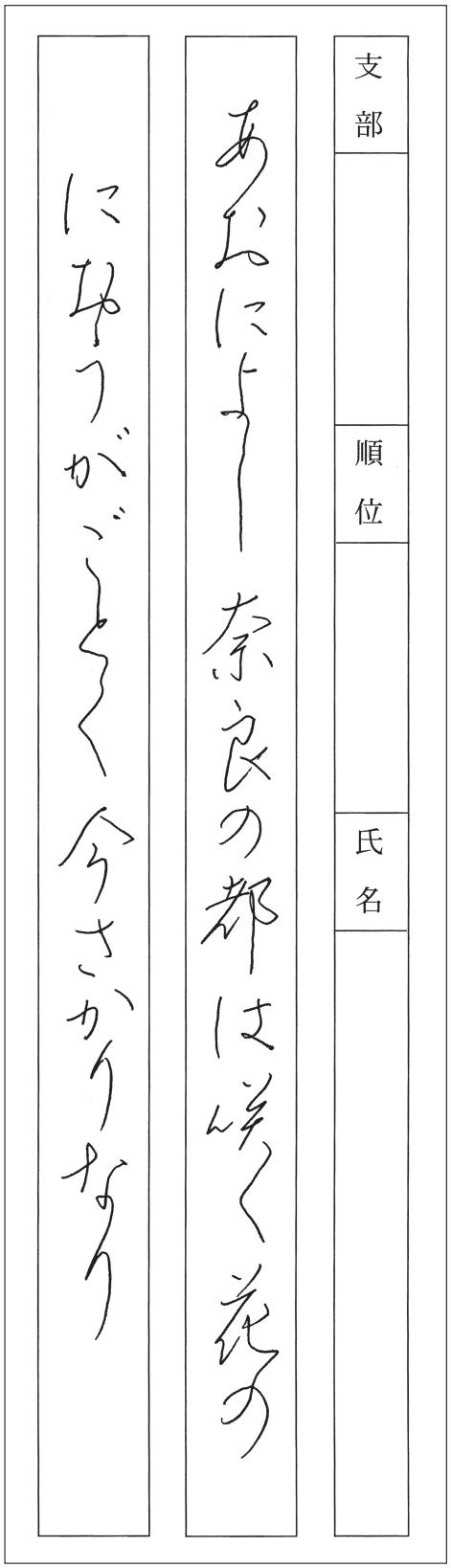
細字部課題　（3月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　キョホインレイ　フギョウロウビョウ

略解　道を歩くのにも法にたがわず頭を上げ身を正し つねに宮殿にいるつもりで、礼儀を守ること



和泉溪石先生書

支部	順位	氏名

建寧元年四月

象雲臨

■史晨後碑（ししんこうひ）（後漢・西暦一六九年）の臨書（4）

『建寧元年四月』

史晨碑は表と裏の両面に刻されていて、碑陽（表）の正式名称は「魯相史晨祠孔子廟碑」といい、略して史晨前碑と言われます。碑陰（裏）の名称は「魯相史晨饗孔子廟碑」で略して史晨後碑と呼ばれています。前後碑では若干の書風と運筆の相違が見られるため、以前は書き手が異なっているとの見解がありましたが、現在では、刻した時期を異にするものの、同一人物による筆であるとの意見が大半です。今月の「建寧元年」の字は、史晨前碑の冒頭を含む二か所に刻されていて、多少の構えの違いは見受けられますが、筆意に共通性が多く普通の変化の範囲内と思われます。また史晨碑の特徴は、後世の研究者が度々「粛括」と表現していますが、つつましやかで、もの静かでしとやかな美しさが特徴です。

今月は六文字の臨書です。結体の安定と全体の統一感に意を払い、急ぎ書きにならないようにじっくり筆を沈めて原帖の風趣を再現してください。

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（6）

（此の地、崇山）峻領（しゅんれい）

象雲臨

『峻領』

本欄で紹介している臨書している蘭亭序は、馮承素摹本（ふうしょうそもほん）と称され、巻頭に「神龍」の印の半分ずつが見られるところから「神龍半印本」と呼ばれるものです。これは蘭亭が定武系・真跡系・褚摹系の三つに大別されるなかで、真跡系に属し、秘匿されていたために明代の中期から脚光をあびるようになったと言われます。数ある蘭亭の中で古くから推されているものは定武系です。これは太宗の生前、欧陽詢の臨本が一番真に迫っていたために石に刻させたと伝えられています。一方、本欄の「神龍半印本」は細部まで筆路が明快なところから人気があります。刻本も多く三希堂法帖にも刻されています。

ただ、この「神龍半印本」は多くの皆さんが難しいと感じているようです。確かに筆路が明快過ぎると、細部の筆致にとらわれ過ぎるきらいがあり、全体の風趣を見失いがちです。逆に定武本などの拓本は、自分で想像を働かせる余地が多分に残されていることから、自分の視点で書かざるを得ず、似せて書くための臨書になりにくく、個性的な臨書作品となる場合が多くなります。